

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	イルカ保育園
施設所在地	武蔵屋第2ビル1階
法人名	聖華株式会社

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然（植物）

<テーマの設定理由>

お散歩中に道端に落ちているお花や葉を拾って持ち帰る姿や、自生しているハーブ（ミントやローズマリー、紫蘇）に触れて匂いを楽しむ姿が多くみられ、植物に興味・関心を持っていた。

さらに、6月よりマリーゴールドの苗を植え、子どもたちが水やりを実施しており、毎日お花の様子を気かけたり水やり当番を心待ちにする姿を見て、こういった体験を大切にさらに広げていきたいと感じた。

また、園の近くにある花屋さんとも顔なじみで、前を通るとお互いに声をかける関係であったため、地域との交流にもつながった。

こういった子どもたちの様子と園の環境から、植物を通じて自然への興味をさらに深めてほしいという思いからこのテーマを選んだ。

## 2. 活動スケジュール

【6月】マリーゴールドの栽培（水やり）

【10月】ケイトウの栽培（植え付け・水やり）

【11月】お花ってなあに？（自由に花に触れる）

【12月】チューリップの栽培（球根購入・植え付け・水やり）

【1月】チューリップの観察（水やり、観察日記）、ピオラの栽培（植え付け・水やり）

【2月】チューリップの観察（水やり、観察日記）、ピオラの観察（水やり）

【3月】染物活動（2歳児の卒園制作）、紙漉き（0-1歳児から2歳児絵の卒園プレゼント制作）

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

#### 【準備物】

- ・キッズカメラ、印刷機（撮影した写真を印刷・掲示するため）、顕微鏡虫かご、図鑑（お散歩やチューリップの観察で使用）、ミシンや布（お散歩時に図鑑を持ち運べるよう手作りバッグを作成）
- ・染色キット、鍋、ガスコンロ等（染物活動のため）
- ・紙漉きキット（卒園制作用）、アロマオイルや布等（手作りポプリ用）
- ・チューリップの球根、花の苗、切り花など

#### 【環境の工夫】

- ・花を育てるだけでなく、育てた花を園で保管し、制作や季節行事で再利用/活用することで、子どもたちにとってより「植物」が身近に感じられるようにした。

### 4. 探究活動の実践

#### <活動の内容>

お散歩にキッズカメラを持っていき道端に咲いている植物を撮影したり、顕微鏡虫かごに拾った植物を入れて観察したり、持ち帰って図鑑で調べたりした。

子どもたちと一緒に近所の花屋へ行き、マリーゴールドや鶏頭、ピオラ等季節ごとに苗を購入し、毎日水やりをして育てた。

ケイトウからピオラへ植え替える際には、子ども達にケイトウを抜いてもらう作業も手伝ってもらった。

よりお花に興味を持ってもらおうと、“なんでもしていい花”を用意し、花びらをちぎったり、においを嗅いだり、葉っぱや茎の手触りを感じるなど、五感をたくさん使った活動も行った。その際、花びらを水にいれてつぶし色が出てくる様子に特に興味を示し楽しんでた。

秋に育てたケイトウと松ぼっくりを使用してクリスマスリースを製作した。

松ぼっくりをラッカースプレーで着色し、ケイトウを飾りとしてつけた。

3月に入ると、卒園に向けた制作を実施した。2歳児は、これまで育てたマリーゴールドとケイトウを使ってトートバッグの染物を、0-1歳児は、牛乳パックを使った紙漉きに花やその色水を飾りつけし、メッセージを添えて2歳児へプレゼントした。

#### ○チューリップの栽培

12月に園芸店へ出かけ、子どもが自分で好きな色の球根を選び購入し、植え付けた。

園芸店では、花屋さんには置いていない様々な種類の苗や球根、果樹など初めて見る植物も多く、子どもたちは自由に触ったりにおいを嗅いだりして興味津々だった。

毎日の水やりだけでなく、キッズカメラで写真を撮り観察日記を作ることで、子どもたちと一緒にチューリップの成長を記録することができた。観察日記は保護者へも共有した。

今年は寒暖差が激しかったためか、卒園児に開花しなかったため、希望者のみ鉢ごとプレゼントした。保護者も開花を楽しみにしており、喜んでいただようだった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

キッズカメラや顕微鏡虫かご、図鑑をお散歩時に持っていくことで、より、周りに咲いている花や葉、落ちている木の実に興味を持っていた。

拾ったどんぐりを図鑑の等身大の絵に重ね合わせて「同じだね」と確認したり、持ち帰ったお花を図鑑で調べたりしていた。また、図鑑には花の名前や特徴だけでなく、“人の形をした花”や“お花の料理”といった珍しい内容も掲載されていたため、そのページを見ながら「これは〇〇ちゃんに似ているね」「こうやってお花を食べてみたいね」「おいしそうだね」と、保育者やお友達と会話を楽しんでいた。

散歩中の草花拾いや園内の栽培等で身近に植物は感じているものの、実際に花を触りちぎったりつぶしたり、鼻を近づけてにおいを嗅ぐ体験はあまりなかったため、「なんでもしている花」の活動はとても盛り上がった。特に、花びらを水の中でつぶすと色が変わる様子には興味津々で、できあがった色水を光に透かしてみたり、花びらを浮かべてその様子を眺めたりと、じっくりと集中して観察する姿は、これまでとは違う新たな一面だった。

春から花の苗を育てる活動を続け、主に2歳児が水やりを行っていたが、0-1歳児がその姿にあこがれを持っており、冬のビオラから0-1歳児に水やり当番を任せることにすると、とても喜んでいて。ビオラは、お散歩中にもよく見かける花だったので、保育者が「このお花は、みんなが育てているお花と同じなんだよ」と声をかけると、それ以降「あ！」と指をさしたり「これ同じなんだよねー」と形や大きさ、色が異なってもすぐに気づき反応するようになった。

チューリップの栽培は毎年行っている恒例の活動だが、今年は子どもたちと一緒に球根を買いに行き自分で選んだ球根を植えたため、これまで以上にチューリップへの愛着を感じた。毎日水やりをしながら「まだ出ないね」と待ちわびたり、芽が出ると「〇〇ちゃんのほうが大きいね」とお友達と比べるなど、チューリップの成長過程を見守る姿が見られた。また、冬になり雪の重みで傾き傷んでしまったチューリップを見て「虫に食べられちゃったのかなぁ…」と悲しそうにする子もいた。

染物の活動では、実際の花の色と染めた布の色の違いにも気づき、マリーゴールドで染めたバッグを見て「たまごやきの色みたい」と子どもらしい表現が聞かれた。

0-1歳児は紙漉き活動を行ったが、お花を飾り付けるときには、じっとお花を見つめる0歳児の姿があり、園内で育てたお花だということになんとか気づいている様子だった。

2歳児は、チューリップ、お花で染めたトートバッグ、これまで育てた花のポップリ、そして、0-1歳児からの紙漉きメッセージカードをプレゼントされると嬉しそうだった。



## 5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・水やり当番を設定することで、自分たちが育てているという意識が強く、毎日気にかけていることがうかがえた。花のちょっとした変化や成長に気づいたり、送迎時に保護者へお花の様子を子ども自らが伝えることで、園児・保育者・保護者とのコミュニケーションが広がった。さらに、園外でお花を育てることで、近所の人たちの目にもとまり、子ども達が水やりをする様子を温かく見守ってくれたり、花の様子を気にかけて職員に声をかけてくれるようになった。子どもの探究活動を通して、園内にとどまらず、保護者や地域との交流にもつながり良かった。

・0～2歳児は、色の認識が強く興味を示す年齢のため、テーマを植物（花）にすることで、自然とさまざまな色に触れることができ、コミュニケーションも図りやすかった。

・今回キッズカメラを導入したが、数回教えただけであっという間に使いこなしている姿を見て、子どもの学習能力の高さに驚いた。身の回りにある道具やそれを使う大人の姿は、乳（幼）時期から、子どもに大きな影響を与えることを改めて感じ、正しい使い方を周りの大人が見せること、正しく伝えることの責任を強く感じる機会となった。

・活動当初、男の子はあまりお花に関心を示さなかったが、探究「活動」としての時間だけでなく、朝夕の自由保育やお散歩等日常生活でもさりげなく植物に触れる機会をつくったり、保育者が何気なく声をかけることで、だんだんと植物への興味が深まっていった。

また、卒園制作として染物をやりたいと保育者間では計画していたものの、色水遊びを間に挟み、その時の子ども達の反応や興味の先を実際に見ることで、染物活動の環境設定や進め方に大きなヒントを得ることができた。子どもたちも、色水あそびの体験があったため、似た染物活動に対してもとても興味を持ち、わくわくと目を輝かせ意欲的に参加していた。

改めて、やりたいこととやりたくないことの差が大きい乳幼児期だからこそ、保育者が日頃からアンテナをはり、一人ひとりの興味を拾って、広げたり深めることのできる声掛けや環境設定が大切だと実感した。

・0～2歳児で同じテーマを設定し、年齢に関係なく自由に活動に参加できる環境にしたことで、特に0, 1歳児は、2歳児の活動に憧れ刺激を受けることができた。一方で、0歳児にはやや難しい活動も多く、十分な体験を提供できなかったという反省があった。今後は、合同での探究活動だけでなく、その年齢に応じた活動も適宜取り入れ、どの年齢でも十分に探究活動を楽しめるよう保育者間で情報交換や話し合いを行っていきたい。

すくわくプログラムを通して、子どもの興味関心に寄り添った活動が、子どもの意欲や自主性を高めることを改めて強く感じた。また、単発での活動で終わるのではなく、自由遊びやお散歩など日頃の活動の中で、興味関心が広がり深まる機会は作れることにも気づいたので、これまで以上に子どもの様子を職員間で密に共有し、保育環境の設定を見直したり工夫しながら、子どもたち一人ひとりとかわっていききたい。